

住様式に関する研究

－ 寝床様式及び主寝室構成について－

扇田 信

西村 一朗

今井 範子

目 次

I 序

- 1-1 研究の動機
- 1-2 研究目的
- 1-3 研究方法・経過の概要

II ベッドメーカーおよびマンション供給者による「ベッド化」促進の状況

- 2-1 ベッドメーカーの販売活動
- 2-2 メーカーのベッド販売・普及対策
- 2-3 住宅供給者側からの「洋式化」

III 結婚適齢世代（大学生）の主寝室洋式化への志向傾向

- 3-1 結婚適齢世代（大学生）の寝床様式の現状
－半数以上がベッド使用を－
- 3-2 ベッド使用開始の時期・意志決定
- 3-3 結婚時、主寝室洋式化への希望

IV 主寝室洋式化（ベッド化）の進行と定着

- 4-1 主寝室ベッド化の現状
- 4-2 狭さが阻む主寝室ベッド化志向
- 4-3 潜在するベッド化要求
－意識上つよいベッド志向－
- 4-4 定着するベッド

V 主寝室洋式化（ベッド化）への志向傾向と要因

- 5-1 ベッド志向の度合
- 5-2 現在の寝床様式別にみた志向
- 5-3 年令別にみた志向
- 5-4 ベッド志向の度合と使用体験との関係
- 5-5 ベッド志向の要因

VI 主寝室の洋式化に伴う問題点

－まとめにかえて－

- 6-1 ベッド使用状況とその問題点
- 6-2 ベッド主寝室の面積的問題
- 6-3 ベッド寝室における収納のあり方
- 6-4 その他一室機能・平面計画上の問題 等

I 序

1-1 研究の動機

住様式に関する研究の一環として、この研究を進めてきたのであるが、このテーマをとりあげた動機ないし意味について前言すると、つぎのようなことである。

最近の都市あるいは特定農村の住宅平面の傾向を概観すると、各室の「洋室化」および椅子坐の傾向が目だっている。畳部屋として残されることの比較的多いものは、夫婦寝室（主寝室）であるが、これしもベッド形式になっていく動向が感じられる。

「洋室化」はどこまで進行するのか。それにともなって住宅計画をどう考えていけばよいかなどが、大きな問題になる。

寝床様式－ふとんからベッドへの移行をとりあげて問題にしたのは、そのような理由からである。

またそれに関連して「主寝室」のあり方も問題になる。なぜなら日本の住生活では、狭小な住居のせいもあるが、子供部屋の確保に意をそそぐほどには、家族の中心である夫婦寝室の確立に、空間的にもプライバシーの面でも意をそそがない傾向が感じられるからである。以上が裏腹の関係にある夫婦の寝床様式を問題にしようとする動機である。

1-2 研究目的

(1) さきのような動機から、成人あるいは夫婦の寝床様式の現状を把握し、「ベッド化」というがその実態はどのようなものか、また今後の動向をさぐる意味で「ベッド化」への潜在要求がどの程度なのか－つまり意識の動向と根拠を探ろうとする。

また、現状、意識の状況を種々の観点から分析することによって、現状の利害得失の問題点をあらい出し、「ベッド化」傾向に対する評価を試みたいと考える。

(2) 加えて、主寝室のおかれている現状、それについての居住者の意識から、今後のあり方を検討しようとする。さらにこの場合「ベッド化」が主寝室形成にどのような影響をもつであろうかについても考察しようとする。

以上のような問題を明らかにすることが、これからの

住生活、住宅計画のあり方を考えるにあたって、大いに意味をもつであろう。

1979年7月19日～25日

404世帯(表2)

1-3 研究方法・経過の概要

1. 研究方法

(1) 研究目的に応じて数種類の調査を行ったが、寝床様式のベッド化傾向をみるにあたっては、居住者の実態・意識調査に並行して、ベッドを積極的に市場に供給しようとしている生産者側の事情についても調査を試み、供給・需要の両面から動向を探ろうとした。

(2) また近い将来、独立世帯の居住者となるであろう人達の動向を知る意味で、結婚適齢世代の男女(具体的には大学生・男女)のベッド需要についての意識調査を試みた。

(3) 既成世帯の居住者については、一般的な「寝室・寝床に関する調査をしたが、調査票を「ベッド使用者票」「ふとん使用者票」にわけて該当者にアンケートすることにより、それぞれの問題点を探りやすくするとともに、潜在的ベッド要求を把握しようとした。

(4) また居住階層としては「ベッド寝室化」が明らかに進んでいるとみられる特定のマンション居住者、および限定された標準プランゆえに「ベッド化」ないし「主寝室確保」に抑制がかかっていると考えられる公団住宅居住者など、居住階層の特性による比較も試みることにした。

2. 調査の概要

以上のために実施した調査の概要は下記のとおりである。

● フランスベッド販売大阪支店 1978年6月28日
生産者側のデータ収集、販売状況・一般動向等のききとり

● マンション等の供給・販売業務体

1978年11月～1979年7月
長谷川工務店(大阪)、大蔵屋大阪店、アーバンライフ本社(神戸)、住宅公団関西支社(大阪)等

供給者側のデータ収集、プランにおける主寝室計画、需要状況のききとり

● 大学生に対するアンケート調査

1978年7月4日～8日
奈良女子大学学生1～4年生および大学院生

142名

京都大学学生 同上 107名

● マンション居住者層のアンケート調査
<ききとり調査含>

1978年11月23日～12月2日

9 マンション 410世帯(表1)

● 公団住宅居住者層のアンケート調査
<ききとり調査含>

3. 研究組織

研究主査 扇田 信(奈良女子大学)。

研究委員 西村 一朗()

今井 範子()。

研究協力者 藤田 佳代子(同 大学院)

高橋 幸子(同 卒業生)

成島 美佐子(同)

調査協力者 服部 久美子(同 大学院)

大石 桂子(同)

○印 本稿執筆者

Ⅱ ベッドメーカーおよびマンション供給者による「ベッド化」促進の状況

2-1 ベッドメーカーの販売活動

ベッドの普及は、もちろん消費者の意向による面も大きい。潜在的な意向を刺激して実際の購求要求へ誘導し、それに対して魅力ある商品を供給するという、生産供給側からの圧力も大いに関係するだろう。

その意味で、生産者側のベッドについての見解を以下にみてみよう。

聴取対象は、戦後いち早くベッドの生産普及にのりだし、現在もわが国で有数のメーカーとして著名な「フランスベッド社」である。戦後10年ほどは、住宅そのものの復興に手一杯であり、起床様式の面ではベッドより先に、食卓と椅子、ついでリビングルームの椅子セットの普及などが主流であったが、経済安定を通じ高度成長期に入ったこの頃から、「昼はソファ、夜はベッド」の転用性をキャッチフレーズに、軽快な折畳式ベッドが市場に出現しはじめる。それは当時の一般的な住宅のせまさを、室数の少なさの中で、耐久消費財への華やかさ、欧米化への憧憬と経済的可能性とに乘じたものであったといえる。一時は爆発的人気をえたが、中間層の居住水準、家財の質などへの要求が高度化するにつれ、ベッドの生産も次第に本格的なものへと移行してきた。しかし折畳式ベッドの供給が、以後のベッド志向に動機やなじみを与える効果をもったことも否めないであろう。

この間の傾向を年次的にみると、図1-aのようになる。全国3500世帯につき、昭和42年には16.2%つまり6世帯に1台でいどの普及率が、年々伸びて52年には44.7%、2世帯に1台はあるというところまできている。この状況を農家・非農家別にみる(図1-b)、42年には両者間の普及率の差が明瞭に出ているが、52年には殆んど同じ状態にまで農家も伸びていることがわかる。

もっともこの比率は、子供用ベッドもふくめたことであるが、当然成人、夫婦のベッド使用の増大も考えて

・回収率＝回収数／配票数
 ・** ベッド率＝ベッド数／全配票数
 ・*** 有効票ベッド率＝有効票数／全有効票数

調 査 対 象 (入居開始時期)		配 票 予 定 数	配 票 数			回 収 数			有 効 票 数			空家 留守 該当 せず	拒否	回収率 (%)	ベッド率 [※] (%)	有効票 ベッド率 ^{***} (%)
			ベ ッ ド	ふ と ん	合 計	ベ ッ ド	ふ と ん	合 計	ベ ッ ド	ふ と ん	合 計					
北 摂 地 域	1. Aマンション・豊中市 ＜北大阪急行沿線＞ (昭和52年3月)	70	15	34	49	8	33	41	8	31	39	21	—	83.7	30.6	20.5
	2. Bマンション・豊中市 ＜北大阪急行沿線＞ (昭和52年3月)	47	14	25	39	14	21	35	10	20	30	8	—	89.7	35.9	33.3
	3. Cマンション・豊中市 ＜阪急宝塚線沿線＞ (昭和51年9月)	70	16	48	64	16	43	59	16	42	58	4	2	92.2	25.0	27.6
	4. Dマンション・豊中市 ＜阪急宝塚線沿線＞ (昭和52年6月)	82	7	21	28	6	21	27	6	21	27	43	12	96.4	25.0	22.0
阪 神 地 域	5. Eマンション・西宮市 ＜国鉄東海道本線沿線＞ (昭和52年3月)	65	15	37	52	14	36	50	14	36	50	8	5	96.2	28.8	28.0
	6. Fマンション・芦屋市 ＜阪神電鉄本線沿線＞ (昭和49年2月)	15	4	5	9	4	4	8	4	4	8	4	2	88.9	44.4	50.0
	7. Gマンション・芦屋市 ＜国鉄・阪神電鉄沿線＞ (昭和51年10月)	12	4	3	7	4	3	7	4	3	7	3	2	100.0	57.1	57.1
	8. Hマンション・西宮市 ＜阪急甲陽線沿線＞ (昭和51年10月)	25	7	12	19	7	12	19	7	12	19	4	2	100.0	36.8	36.8
	9. Iマンション・西宮市 ＜阪急神戸線沿線＞ (昭和52年5月)	24	9	5	14	6	5	11	6	5	11	9	2	78.6	64.3	54.5
計		410	91	190	281	79	178	257	75	174	249	104	27	91.5	32.4	30.1

A～E：長谷川工務店 設計
 F～I：アーバンライフ 分譲

A：日商岩井緑地公園マンション B：日商岩井第2緑地公園マンション C：西緑ヶ丘スカイハイツ
 D：第2西緑ヶ丘スカイハイツ E：パストラル甲子園 F：芦屋パインタレスト
 G：芦屋柳町アーバンライフ H：北広田アーバンライフ I：夙川アーバンライフ

■ 住戸型

	ふとん	ベッド	計
2LDK	7 (4.0)	4 (5.3)	11 (4.4)
3LDK	165 (94.8)	66 (88.0)	231 (92.8)
4LDK	2 (1.1)	5 (6.7)	7 (2.8)
計	174 (100.0)	75 (100.0)	249 (100.0)

■ 住戸専有面積 (㎡)

面積(㎡)	ふとん	ベッド	合 計
60.0未満	5 (2.9)	4 (5.3)	9 (3.6)
60.0以上～65.0未満	112 (64.4)	47 (62.7)	159 (63.9)
65.0以上～70.0未満	29 (16.7)	7 (9.3)	36 (14.5)
70.0以上～75.0未満	18 (10.3)	5 (6.7)	23 (9.2)
75.0以上～80.0未満	5 (2.9)	2 (2.7)	7 (2.8)
80.0以上～85.0未満	0	0	0
85.0以上～90.0未満	3 (1.7)	7 (9.3)	10 (4.0)
90.0以上～95.0未満	0	2 (2.7)	2 (0.8)
95.0以上～100.0未満	0	0	0
100.0以上	2 (1.1)	1 (1.3)	3 (1.2)
計	174 (100.0)	75 (100.0)	249 (100.0)

(%)

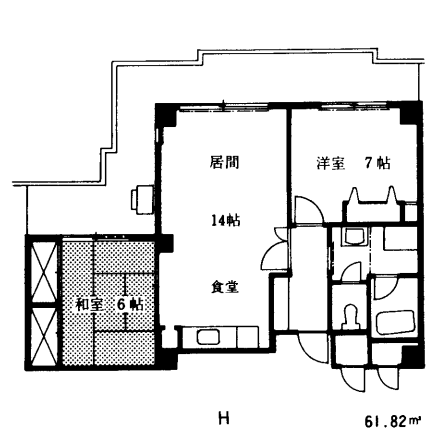
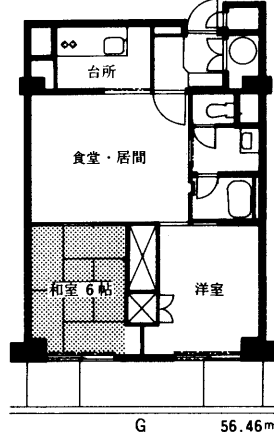
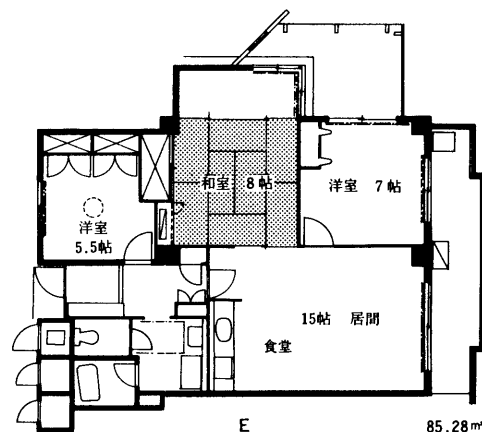
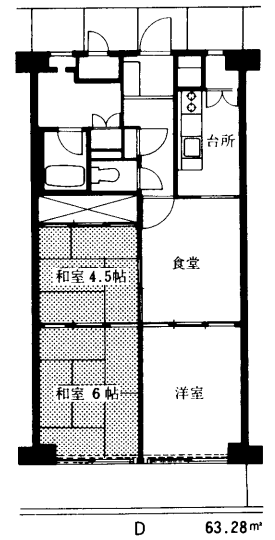
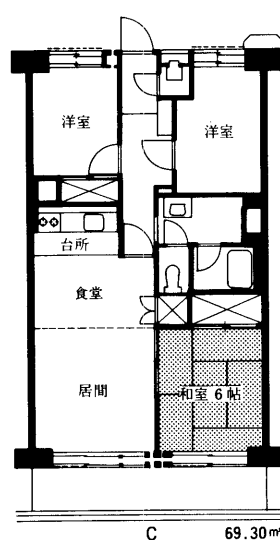
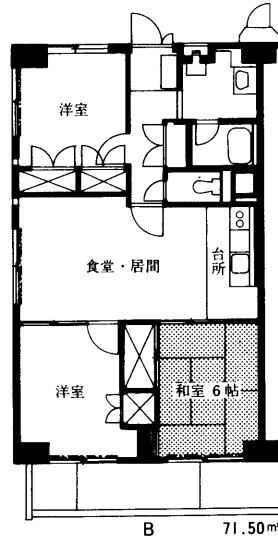
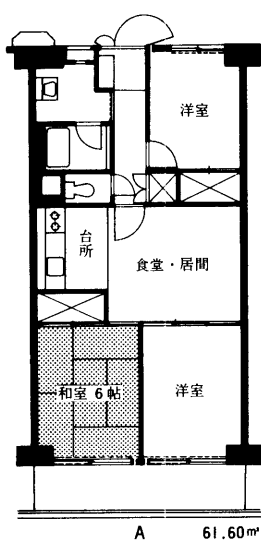


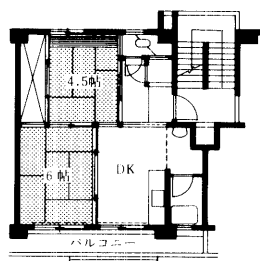
表-1 調査対象の概要—マンション—

住戸型	団地別	住戸面積 (㎡)	ふとん	ベッド	計	各住戸型別		開放・独立別	ベッド率 %
						ベッド率 %	開放・独立別 %		
2	1. 開放 (6・4.5)	逆瀬川	37.40	16 (100.0)	0 (0.0)	16 (100.0)	0.0	6.4	9.4
		千里・竹見台	"	16 (100.0)	0 (0.0)	16 (100.0)			
	2. 開放 (6・6)	千里・竹見台	39.46	9 (100.0)	0 (0.0)	9 (100.0)	10.9		
		泉北・竹城台	"	32 (86.5)	5 (13.5)	37 (100.0)			
K	3. 独立 (6・4.5)	千里・竹見台	36.41	28 (87.5)	4 (12.5)	32 (100.0)	13.1	13.1	
		泉北・竹城台	38.76	25 (86.2)	4 (13.8)	29 (100.0)			
3	4. 開放 (6・4.5・4.5)	逆瀬川	42.94	25 (100.0)	0 (0.0)	25 (100.0)	0.0	0.0	0.0
		千里・竹見台	43.34	23 (100.0)	0 (0.0)	23 (100.0)			
	5. 開放 (6・6・4.5)	泉北・竹城台	45.25	38 (100.0)	0 (0.0)	38 (100.0)	0.0		
2 L D K	6. 独立 (4.5・4.5)	逆瀬川	49.64	9 (90.0)	1 (10.0)	10 (100.0)	11.1	13.8	13.8
		千里・竹見台	"	7 (87.5)	1 (12.5)	8 (100.0)			
K	7. 独立 (6・4.5)	泉北・竹城台	50.07	9 (81.8)	2 (18.2)	11 (100.0)	18.2		
3	8. 開放 (6・4.5・4.5)	逆瀬川	47.99	14 (100.0)	0 (0.0)	14 (100.0)	9.6	9.6	13.5
		千里・桃山台	53.87	24 (85.7)	4 (14.3)	28 (100.0)			
		泉北・竹城台	47.81	9 (90.0)	1 (10.0)	10 (100.0)			
	9. 独立 (6・4.5・4)	千里・竹見台	47.54	17 (89.5)	2 (10.5)	19 (100.0)	18.2		
K		泉北・竹城台	48.06	10 (71.4)	4 (28.6)	14 (100.0)		17.3	
	10. 独立 (6・4.5・4.5)	泉北・城山台	55.93	16 (84.2)	3 (15.8)	19 (100.0)	15.8		
3 L D K	11. 独立 (6・4.5・4.5)	泉北・城山台	67.40	18 (90.0)	2 (10.0)	20 (100.0)	10.0	6.5	6.5
	12. 独立 (6・6・4.5)	千里・桃山台	66.45	25 (96.2)	1 (3.8)	26 (100.0)	3.8		
計			370 (91.6)	34 (8.4)	404 (100.0)		8.4		

・ 分譲 印のないものは賃貸

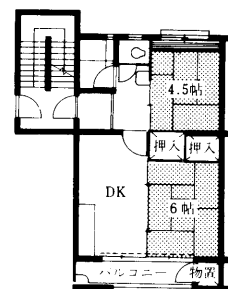
(条)

住戸型 1



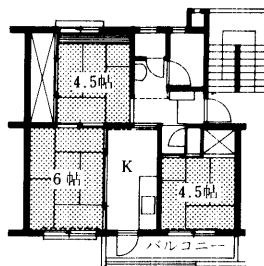
2DK・開放 (6・4.5)

住戸型 3



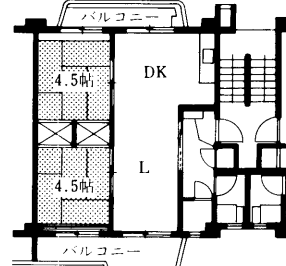
2DK・独立 (6・4.5)

住戸型 4



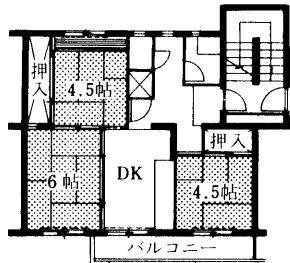
3K・開放 (6・4.5・4.5)

住戸型 6



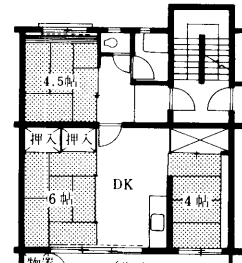
2LDK・独立 (4.5・4.5)

住戸型 8



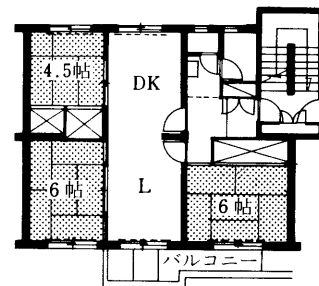
3DK・開放 (6・4.5・4.5)

住戸型 9



3DK・独立 (6・4.5・4)

住戸型 12



3LDK・独立 (6・6・4.5)

■ 団地別ベッド率

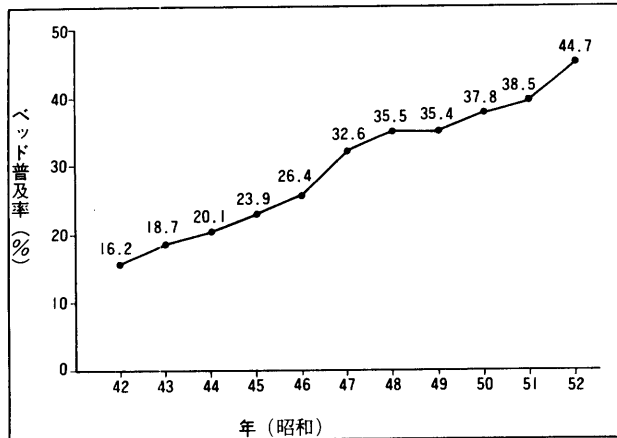
逆瀬川団地	1例／65例中	1.5
千里ニュータウン 竹見台 桃山台	12例／160例中	7.5
泉北ニュータウン 竹城台 城山台	21例／179例中	11.7

■ 各団地・入居開始時期

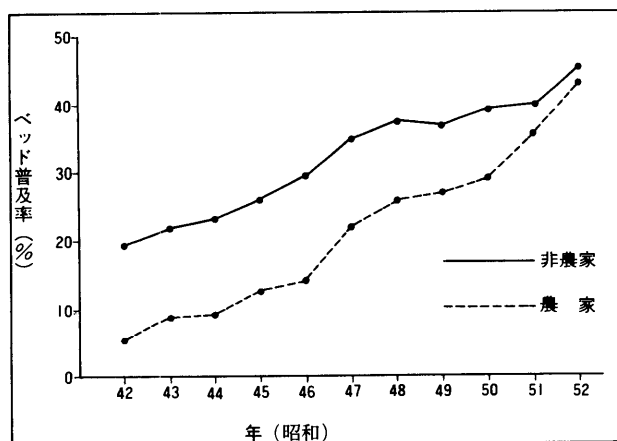
3DK・開放 (6・4.5・4.5)

- 逆瀬川団地 昭和41年2月
- 千里・竹見台 昭和42年7月～46年2月
- 泉北・竹城台 昭和46年9月～48年1月
- 千里・桃山台 昭和44年2月
- 泉北・城山台 昭和53年3月

表-2 調査対象の概要 - 公団住宅 -



a, ベッド普及率 (全国3,500所帯)



b, ベッド普及率 (農家・非農家別)
「消費と貯蓄の動向」より

図一 ベッド普及率

よい。

因みにメーカー側のマーケットリサーチで、北九州・東京で無作為抽出1000人に対する「ベッド要求度」のアンケートでは、「ベッドが欲しい」と答えたもの97%、「ベッドを買いたい」と答えたもの50%という結果が出ている。

この結果を裏書きするように、昭和51～52年の売れ行き伸び率は、全商品中でベッドが第4位を占めている。

また「暮らしに変化を与えるとしたら耐久商品で何を買うか」というOLへのアンケートに対して、1位がベッドであったという結果もある。

メーカーはその販売政策上、つねに自他の市場調査を計測しているが、以上のような状況を注目しながら今後の成行きについては、相当な自信を見せているといつて過言ではない。またその結果をにらみながら、種々の販売・宣伝の手をうっているといえるだろう。

2-2 メーカーのベッド販売・普及対策

もちろん直接販売営業に関連する対策もあるが、ここ

ではベッドのあり方に関する問題を取りあげてみる。

(1) ベッド型種の多様化と生活要求への対応

消費者のおかれていた様々な経済条件、居住条件に対応するように、種々の型を開発している。ソファベッド（ソファの背もたれを倒すとベッドになる）、ウォールベッド（壁面に立てることができる）、格納式ベッド（ベッドの下にもう1つのベッドをしまえる）、2段ベッド（主に子供用）などがあげられるが、いずれも居室面積のせまさを、転用などをねらったものである。この他、リラク্সベッド（マットの角度が換えられる）などもある。しかし住居水準の上昇やベッド利用が本格的になるほど特殊型種の人気は落ち、生産も手控える傾向にある。

むしろダブル、セミダブル、シングルなど標準的な形式が、成人のみならず子供用にも増えつつある。また、夫婦寝室にもダブルではなく、セミダブルとシングル、シングル2台などの傾向も出ている。（この点は、ヨーロッパでも似た傾向があり、アメリカではダブルが好まれるなど、国民性による特色もあるようである。）

(2) 日本人向きベッド装備の開発

ベッドパッド

欧米の寝具は、ベッドパッド（ベッドの上に敷く）も薄く、掛ぶとんも大きく薄いのが、比較的寒冷的な日本の寝室気温を考慮して、綿を厚めに入れたパッド、掛ぶとんに組合わせたベッドカバーなどを考案して、在来のかぶとんの風合、重みを出そうとしたりしている。

(3) ベッド装備の魅力化

ベッドの利用が一般化するにつれて、ベッドそのものの意匠・機能を上質・魅力的なものにする傾向があらわれている。マットレス、スプリングを重ねる等、寝床面の快適性の追求、木部や繊維被覆に意匠をこらすなどがそれである。

また、ナイトテーブル、ドレッサーの附属品についても同様であるが、さらに机・椅子、タンス類を1セットにユニット化してまとめるなど、ベッドを中心にした寝室インテリアにまで守備範囲を拡張する傾向もみられる。

(4) ベッドの利点の強調

メーカーとしては当然のことながら、ベッドがふとんの就寝にまさる点を強調するが、たとえば衛生的であるとか、ふとんのあげおろしが不要であるとか、当店は別として一般にいわれている類のものである。

2-3 住宅供給者側からの「洋式化」

寝床装備そのものではないが、ベッド使用それもとくに主寝室について、ベッド使用を前提とした住宅供給が、寝室の「洋式化」を促すことも考えられる。

公営・公団住宅については、平面構成に一定の規格があり、DKあるいはD、Lが板敷になっているが、寝室

部分は大体畳敷になっている。

したがって、平面構成についてももう少しバラエティをもつマンションについて調べたのであるが、プランに示されるように1室は和室で残しているが、他は洋室のものが多。またハイクラスのものに、主寝室たるべき室が洋式になっているものが多い。またそのようなマンションの場合、当然「ベッド率」も非常に高くなっている。

Ⅲ 結婚適齢世代（大学生）の主寝室洋式化への志向傾向

現代の都市住居では、子供部屋を板間にするプランがよくみられるが、これは椅子式の勉強机が早く戦前から普及しはじめていた結果によるものだろう。したがって、寝床もベッドになる動機を十分にはらんでいる。また室面積のせまさから、一時流行をみたように2段ベッドの利用も、ベッド化の誘因となりえただろう。

このような子供部屋で成長した成人たちが、結婚後どのような寝床形式を指向するかは、これからの寝床様式のみならず、主寝室のあり方に大きな影響力をもつのではない。以上が、表題のような問題をとりあげた理由である。

そのような対象者として、1章であげたように京都大学学生と奈良女子大学学生をとりあげた。それらが適齢者を代表するわけではないが、大学卒業者が将来全体の住宅階層で住生活の発展に対して、ある程度先進的立場をとるであろうという意味で適当と考える。また地域的な格差も大いにあるのだが、大都市近傍という条件下で考えることにした。

3-1 結婚適齢世代（大学生）の寝床様式の現状 — 半数以上がベッド使用を —

図2に示すように、ふとん使用率が自宅において59%、下宿においては73%と、いずれも過半数を占めている。しかしベッド使用率を軽くみることはできず、自宅もしくは下宿（寮含む）でベッドを使っている者は54.7%にのぼる。つまり過半数がベッド生活の経験を持つということであり、若い世代のベッド化は進行しているといえる。自宅・下宿別に見ると、自宅でのベッド使用率は41%であり、これを学生の出身地域別つまり大都市、地方都市、農村地域などに大別してみると、かなり明瞭な地域差が出ている。すなわち大都市及びその圏内に自宅を持つ場合50%がベッドであるが、農村地域では22%にすぎず、都市性が増すほどベッド化の率が高いという傾向が、はっきりとあらわれている。

寝室形式と寝床様式との関係を見ると（図3）、洋室ではベッド、和室ではふとんの利用が圧倒的に高率であり、当然のことながら両者の相関関係は非常に強くあら

- INDEX
- 1 自宅通学ベッド
 - 2 自宅ベッド下宿ベッド
 - 3 自宅ベッド下宿ふとん
 - 4 自宅ふとん下宿ベッド
 - 5 自宅ふとん下宿ふとん
 - 6 自宅通学ふとん
- ベッド
□ ふとん

全 体 (249人)		1	2	3	4	5	6
		13.3	6.4	20.4	13.7	35.3	10.0
		54.6				45.4	
現住居別	自宅 (249)	41.0				59.0	
	下宿 (191)	26.7				73.3	
自宅地域別	大都市 (50)	46.0				54.0	
	大都市圏 (59)	50.8				49.2	
	中小都市 (96)	39.6				60.4	
	農村地域 (41)	22.0				78.0	

図-2 結婚適齢世代(大学生)の寝床様式の現状

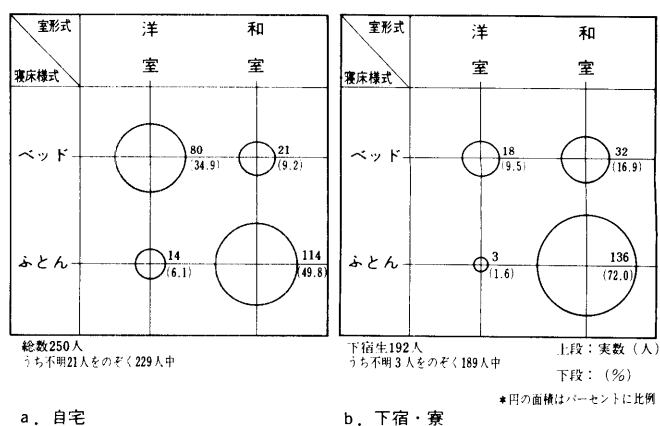


図-3 結婚適齢世代(大学生)の寝室形式の現状
— 寝室の床形式と寝床様式との関係 —

われている。ただ洋室でのふとん使用例は少ないが、和室でベッド使用例はかなり多くみられることから、ベッド志向の傾向をうかがい知ることができる。

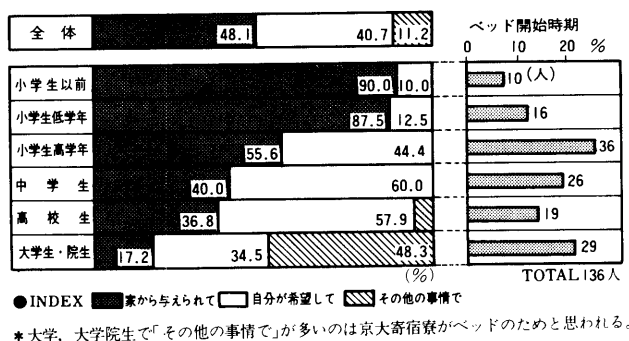
3-2 ベッド使用開始の時期・意志決定

ベッドの使用経歴や動機を知ることは、その定着度を考えるためにも興味あることである。図4・右は自宅・下宿のいずれかでベッドを使用している者について、開始時期別にみたものであるが、小学生高学年（4～6年生）から中学生にかけて山がある。つまり最近の若年層は、幼・少年期からベッド生活に入るものが多いということである。これは最近の住宅平面で子供室が、椅子式の勉強机を想定した板間としてとられることが多い傾向を反映しているものと思われる。

ただ、もうひとつの山は大学生にあるが、これらのう

ち75%が下宿・寮においてであり、家庭を離れて外宿することが、いまひとつのベッド化の機縁になっているということであろう。

開始時期に関連して意志決定の所在をみると図4・左のようになる。時期が早いほど、特に小学生低学年までは、「家から与えられて」が多数を占め保護者の意向が大きく影響しているが、小学校高学年、中学年、高校生となるにしたがって、本人の要求度が高くなっていくのは自然の傾向といえよう。しかしそのことは、とりもなおさず今後の住様式の選択傾向につながることである。

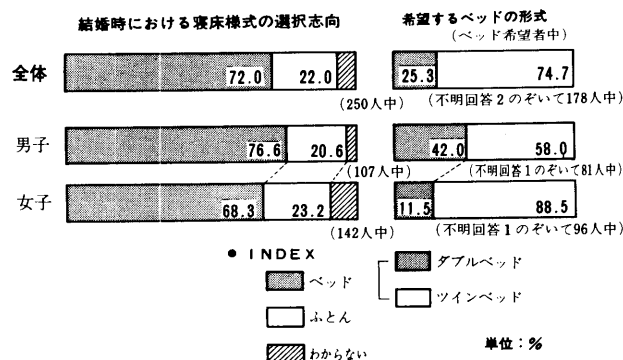


図一 4 ベッド使用開始時期と意志決定〈大学生調査〉

大学生の場合、自分の意向によることは当然であるが、「その他の事情」に支配されている率が40%以上を占めている。そしてそれは「下宿でのみベッド」の生活者に集中しており、下宿・寮等の室空間の条件が影響を与えていることが大きいとみなされる。

3-3 結婚時、主寝室洋式化への希望

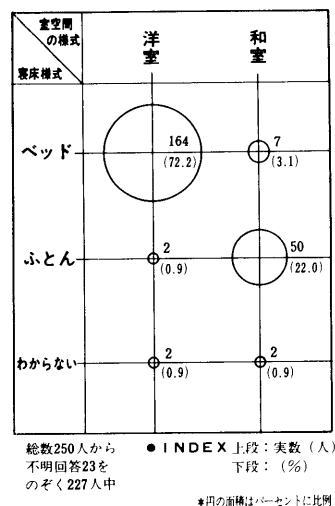
図5は、彼らが結婚—つまり独立した1戸の家庭ないし住居を設定する時点で、寝室・寝床様式として何をえらぶかという志向傾向を示している。



図一 5 結婚適齢世代(大学生)の結婚時における寝床様式の選択希望

これによると男子の約8割、女子の約7割がベッドを想定しており、在来のふとんを考えるものは2割しかない。

また寝室の和洋2形式については、当然のことながら図6のように、ベッドは洋室、ふとんは和室に固まるが、



図一 6 結婚適齢世代(大学生)主寝室の様式への希望

7割強が洋室の主寝室を希望することになる。

なお、寝室内での夫婦のベッド形式についてもさらに聞いてみると、「夫婦はダブルベッド」の観念は通用しない。全体では75%が、夫婦別々のベッドを希望している。(実生活では、最近ではツインとシングルの組合せが好まれるということもきく)。たゞ、男女別にこの傾向を探ると、男のダブル希望42%に対し、女の12%というぐあいに、かなり特徴的なちがいをみることができる。

このことは、ベッドを選ぶとする理由の中にもあらわれているようである。(図8・a)。いくつかの理由の中で、女性側は「ふとんの仕末が簡単になる」のでベッドにしたいと考えるものが、ひじょうに多いのに対し、男性には少ない。

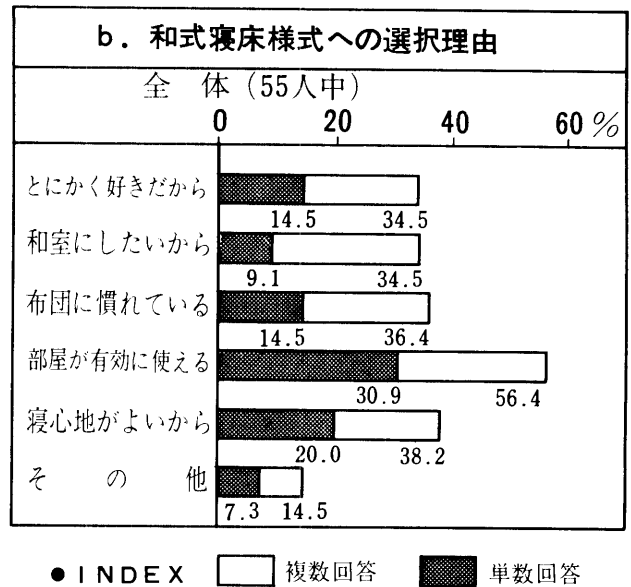
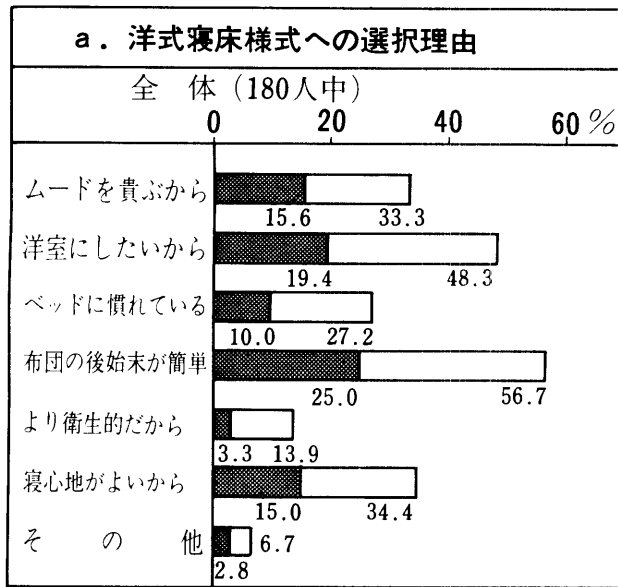
またやゝ顕著にあらわれているベッドのもつ「ムード」志向に対しては、男性では多いが女性には少ないなどの傾向がある。

ちなみに、ふとん希望者についてもその理由をみると(図7・b)、「部屋が有効に使える」つまりふとんをたゝんだ後の室の転用性を評価する理由が最も多いが、これも男女別にみると(図8・b)、女性の方に絶対に多い。逆にふとんが「とにかく好き」というベッドの「ムード」に対応する理由では、男性が断然多いという現れ方である。

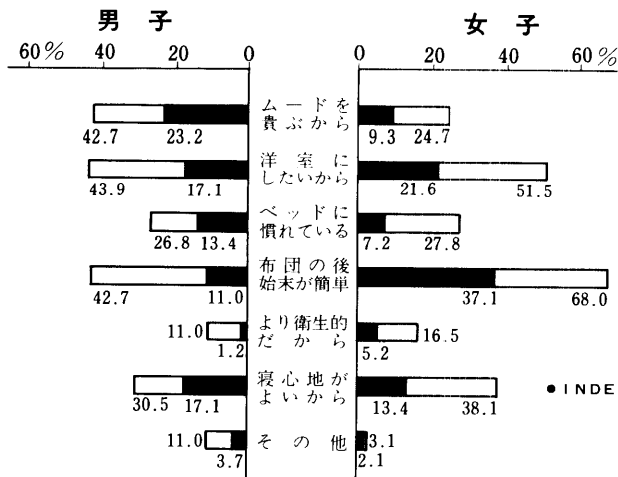
どちらかという女性、家事その他の実際的理由から、男性はそれもあるが、気分的な理由にもかなり評価をおいているといえよう。

主寝室の和・洋室化の志向については前に述べたが、その希望の根拠について、とくに洋室の場合をとりあげると図9のようになる。

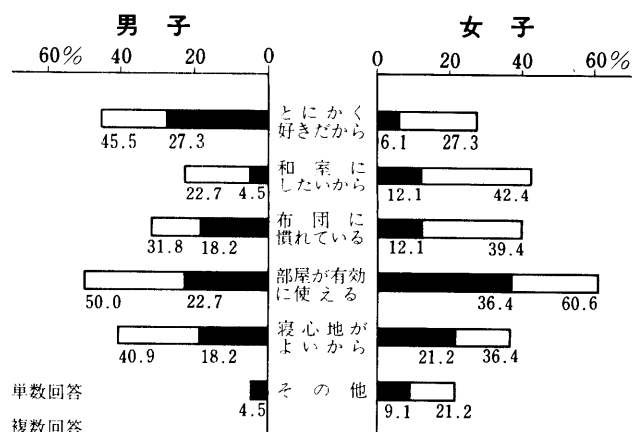
現在すでにベッドを使用しているものと、していないものとは、多少の差があるが、「ふとんの仕末」については両者とも、相当に高い比率を示し、この面を通し



図一 結婚適齢世代(大学生)の結婚時における寝床様式選択理由



ベッド選択希望者：男子82人・女子97人中

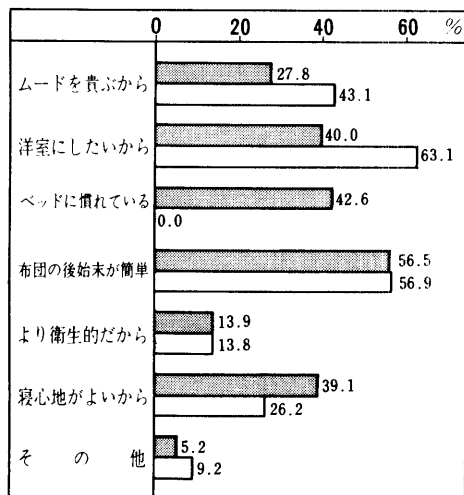


ふとん選択希望者：男子22人・女子33人中

a. 性別からみた洋式(ベッド)寝床様式の選択理由

b. 性別からみた和式(ふとん)寝床様式の選択理由

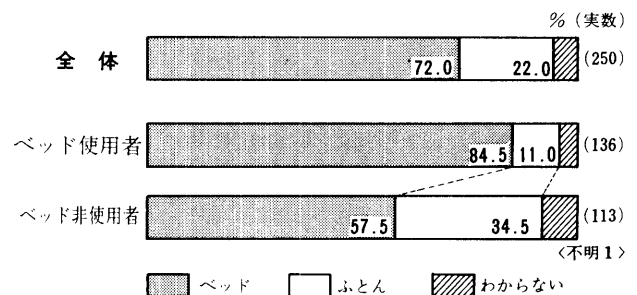
図一 性別からみた結婚適齢世代(大学生)の寝床様式選択理由の相違



ベッド使用者115人・非使用者65人中

● INDEX ■ ベッド使用者 □ ベッド非使用者

図一 9 ベッド使用者・非使用者別にみたベッド選択理由
〈大学生調査〉



図一 10 ベッド使用者、非使用者別にみた寝床様式の
選択希望 〈大学生調査〉

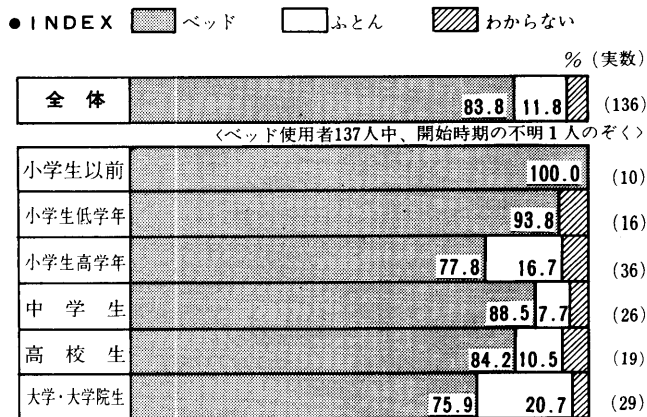


図-11 ベッド使用開始時期と寝床様式希望との関係
＜大学生調査＞

て洋室化を求めるものゝ多いことを示している。

また、現在、ふとん使用者が「ムード要求」や「洋室にしたい」ことに、ベッド使用者より高い比率を示すことも、この希望のつよさを示すようである。全体的に考えて「ベッド志向」がすなわち「洋室化」と同じ意味をもつこともわかる。

適齢世代の以上のような傾向が、これまで育ってきた寝床環境とどの程度かゝわりがあるかを、示唆するものが図10、11である。

これによると、現在ベッドを使用しているグループほど今後の志向性も多く、また使用体験が長いものほど同様のことがいえ、体験の如何が、ベッド志向の度合につよく影響するものといえる。

Ⅳ 主寝室洋式化（ベッド化）の進行と定着

前章で結婚適齢世代の寝床様式の現状と意識をみてきたが、ここでは実際に世帯をもち独立した住居で生活している人達についてその動向を見ていこう。

4-1 主寝室ベッド化の現状

一連の起居様式動向調査^{*}において、主寝室の洋式化（ベッド化）の一般的傾向を把握した。それによれば、

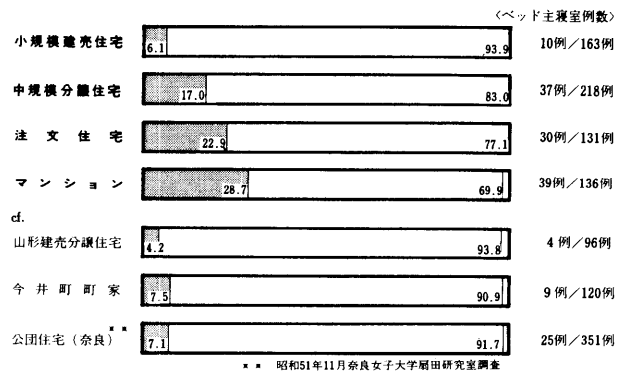


図-12 住宅階層別にみた主寝室のベッド化状況
——一連の起居様式調査より——

地域別・住宅階層別にベッド化進行の程度に差異が見られ（図12）、さらに、どの住宅階層においても年齢の若い夫婦ほど主寝室ベッド化の傾向が強いことがわかった（図13）。

今回は、主寝室洋式化への志向傾向をより詳細に検討することを目的として、ベッド化への潜在的な要求及び主寝室のベッド化に伴う問題点に焦点をあてた居住者調査を行なった。

このような観点から、調査対象として、(1)比較的室数、面積に余裕をもち寝床様式等に選択の自由度が高いと考えられるマンション居住階層、(2)前者に比べ限定された住居に住み、それが選択の自由度を抑制するだろうと考えられる公団住宅居住階層を選定した。前者は最もベッド化が進行している階層であり、後者は若い世代に対応しているもののベッド化進行度が低い住宅階層である。

(1) 公団住宅（今回調査）の主寝室ベッド化

公団住宅の主寝室ベッド化率は、今回の調査においても8.4%と、前回調査と同じく低く、全体としてはベッド化が進行していない。

^{*} 住宅建築研究所報No.5 1978

No.7704 住様式に関する研究 一床面様式と起居様式一

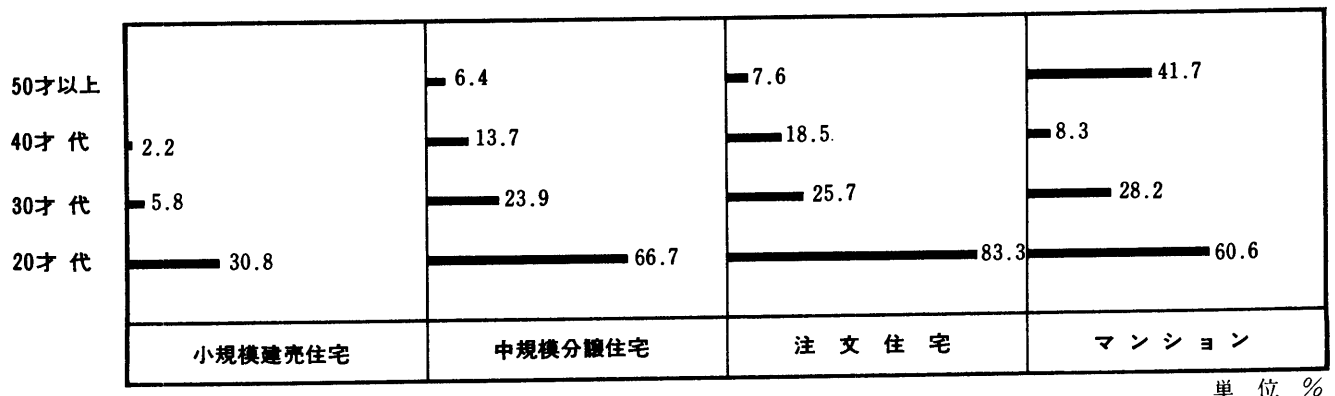


図-13 主人の年齢別にみた主寝室のベッド化傾向 ——一連の起居様式調査より——

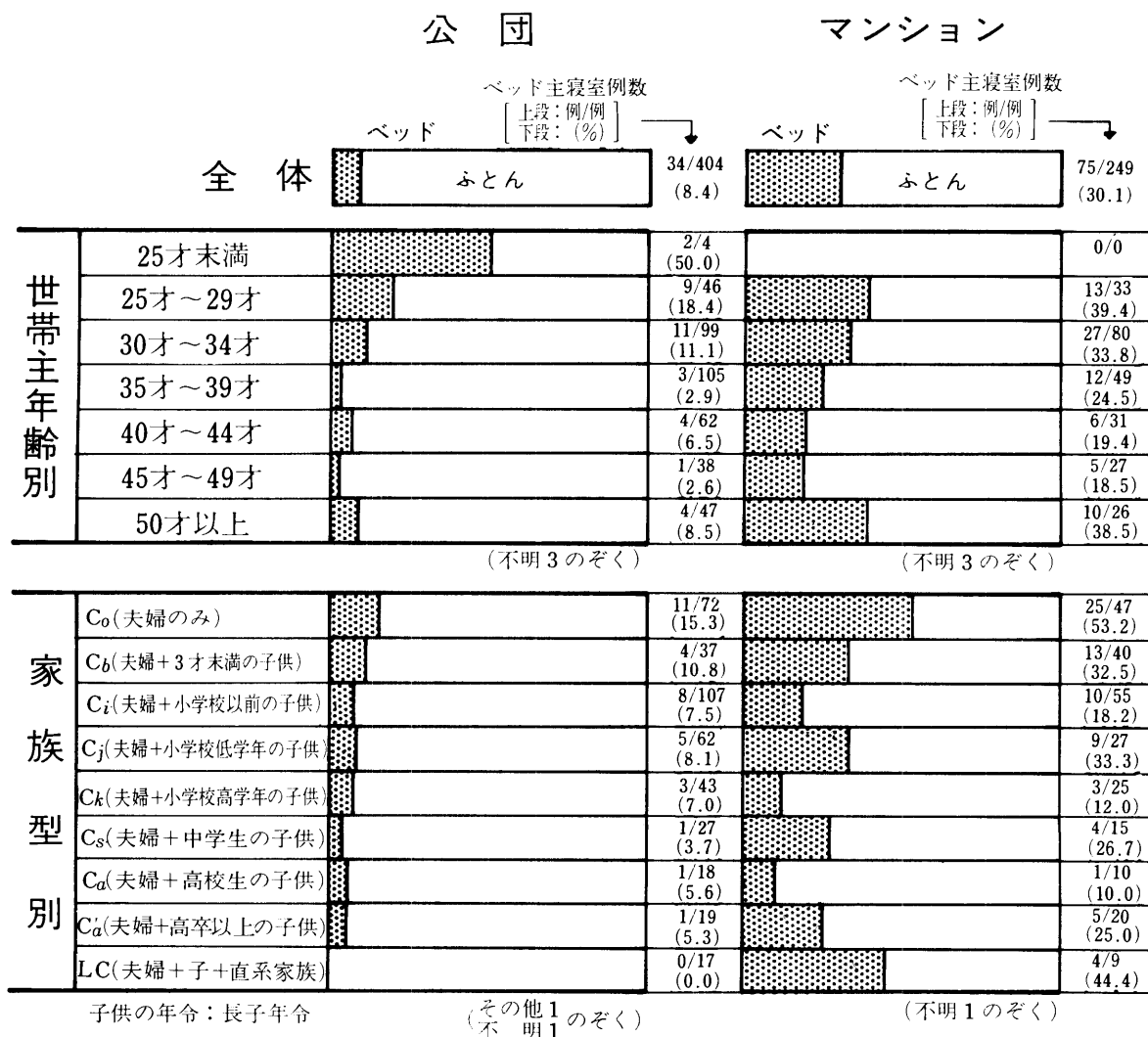


図-14 主寝室の洋式化(ベッド化)の現状 〈公団・マンション〉

—全体・年齢別・家族型別—

ところが、同じ公団住宅の中でもこれを年齢別(家族型別)、住宅型別、団地別に分けてみると、ベッド化の程度に顕著な差異が認められる。

まず入居者の年齢別に見ると(図14)、30才前後の若い夫婦において、主寝室ベッド化の傾向がより強くあらわれている。若い夫婦ゆえ、家族型も、夫婦のみや、小学校以前(乳幼児)、小学校低学年までの子供のいる場合が多く(図14)、家族人数も少ない。

次に住宅型別にみると、3Kのベッド化率0%に対し、2LDK・3DKでは14%とベッド化率が1割をこえている。3Kより規模の小さい2DKでは、1割近い9.4%のベッド化率を示しているが、これは家族数の少ない若い夫婦の占める割合がより多いことによるものと考えられる。ベッド化率は夫婦の年齢(家族型)に、より支配されているといえよう。

住宅型別にみた特徴として、独立型のプラン(独立度の高いプラン)にベッド化率が高く、開放型プランに低いという傾向が見られる(表2)。プラン型の質的条件

によってベッド化しやすいプランとにくいプランがあるようである。後述のように、ベッド化の一つの理由として個室化したい(主寝室の確立)ということがあげられ、それを反映しているともうけとれる。

団地別にみると、入居開始時期の新しい団地ほど、すなわち泉北、千里、逆瀬川の順にベッド化率が高い(表2)。これも地域差というより、新しい団地ほど入居者に若い夫婦が多く、年齢(家族型)に支配されて、団地別にベッド化率に大きい差異があらわれたと考える。

以上のように住宅型別、団地別にベッド化率の差異がみとめられるが、大きくは夫婦の年齢(家族型)に支配されていると考えられる。

(2) マンション(今回調査)の主寝室ベッド化

一連の起床様式調査^{*}(図12)において、マンションは住宅階層の中で最もベッド化が進んでいた。今回の調査では30.1%(75例/249例中)とさらに高いベッド化率を示している。

入居者の年齢別に見ると、先の公団住宅と同様に若い

夫婦にベッド化率が高いことがあげられるが、年齢の高い向老令層においても1つの山があることが、マンションでの特徴である。若い人々だけでなく向老年層にもベッドがうけ入れられていることがわかる。マンション・公団ともに、家族人数の多い中年期の夫婦（子供の個室要求が出る頃）において、ベッド化率は低い。同じ住宅規模であっても、子供がふえ子供が成長期にある家族型では、住宅はより狭くなり、後述のように狭さがベッド化を阻んでいる。

マンション対象別にみると、いわゆる大衆マンションを大半対象にしたわけであるが、そこでは25～30%のベッド化率である。ベッド主寝室を検討するために、一部、最初からベッド主寝室として計画されているマンション（やや高級マンション）を比較のために選んだが、そこでは入居者の洋風化への好みも影響し、当然高いベッド化率を示している（表1）。

(3) ベッド化の時期

－半数以上が結婚時からベッド化を－

ベッド化の時期は、表3に示すように半数以上が、結婚時（結婚の道具）からである。最近結婚の年齢の若い者ほど結婚の時点からベッドにしている様子が顕著であり、前述したように、結婚前の若い世代における主寝室ベッド化要求の多いことを考えると、住宅事情さえゆるせば、今後ますますこういう傾向が強まっていくだろうと思われる。

ば、今後ますますこういう傾向が強まっていくだろうと思われる。

表-3 ベッド化の時期—公団・マンション—

	公 団		マンション	
	実 数	%	実 数	%
結婚時から（結婚の道具）	18	52.9	39	52.0
今の家に入居する前	8	23.5	12	16.0
今の家に入居してから	7	20.6	22	29.3
不 明	1	2.9	2	2.7
計	34	100.0	75	100.0

4-2 狭さが阻む主寝室ベッド化志向

(1) 狭さにぶちあたる若い世代の主寝室ベッド要求

－結婚時に実現されぬベッド要求－

前述のように結婚をひかえた若い世代において、主寝室ベッド化の希望が高まりつつあるが、それが実際には実現されるとは限らないことが居住者対象の調査よりうかがい知ることが出来る。そして、住宅の狭さがそれを大きく阻んでいるのである（図15）。

しかし、学生調査でのベッド志向の強さを暗示するように、主人・主婦の年齢の若いほど結婚の時にベッドにしたかったという傾向が出ており（図16）、今後、ベ

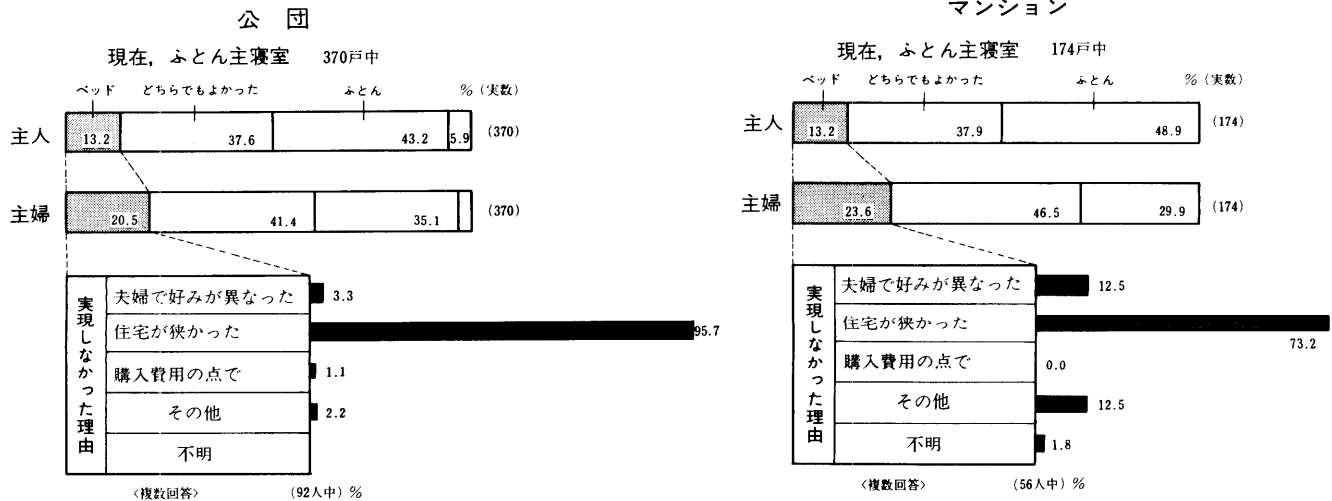


図-15 結婚前の主寝室寝床様式(ベッド、ふとん)希望とベッドが実現しなかった理由

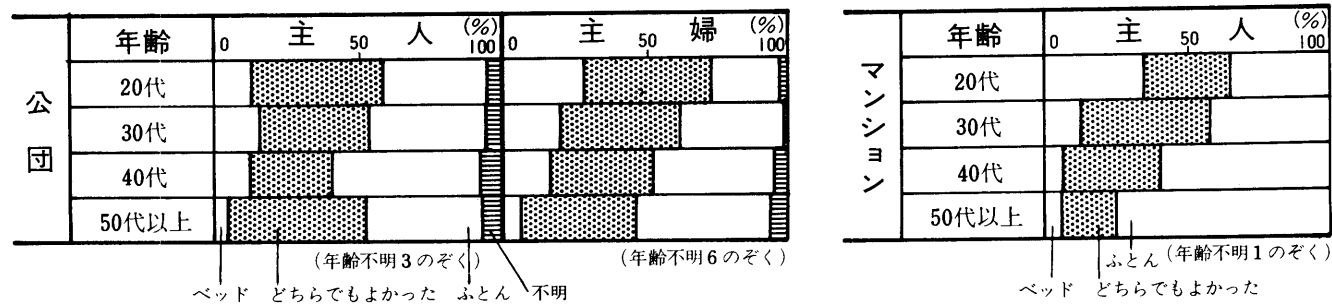


図-16 公団・マンション居住者の結婚時の寝床様式の希望 <現在ふとん使用者>

ッドにしたいという要求のより増えることが予測されう
る。

(2) ベッドにしたが実現されても、狭さが原因でやめ
る例が

ーしかし、ベッドへの希望はすてておらずー

ベッドの主寝室にしたが、今はやめてふとんにしてい
る例が少なからずみられた。公団の場合で、現在ふとん
にしているもののうち一割がそうであった(表4・a)。
多くがベッドをつかいはじめて1～4年のうちにやめて
しまっている。例えば二人だけの新婚のうちはなんとか
いけたが、子供がふえて狭くなったというように、狭さ
が原因でやめているのである(表4・e)。

しかし、こうしてベッドをやめていても、ベッドへの
希望をすてていないものが多く(表4・f)、狭いから
止むを得ずベッドをやめたと考えられ、狭くさえなけれ
ばベッドを続けていたと思われるのである。

表一 4 現ふとん寝中、一度ベッドにしたが、やめた例
ー公団住宅ー

a. ベッドにしたが今はやめている

ベッドにし たが今はや めた	36例/現ふとん寝 (9.7%) 370例中
----------------------	---------------------------

b. ベッドにした時期

結 婚 時 か ら (結 婚 の 道 具)	13 (36.1)
今 の 家 に 入 居 す る ま え	12 (33.3)
今 の 家 に 入 居 し て か ら	3 (8.3)
不 明	8 (22.2)
合 計	36 (100.0)

(%)

c. 結婚後のベッドの期間

1年～2年	10 (27.8)
3年～4年	11 (30.6)
5年～6年	5 (13.9)
7年～8年	3 (8.3)
9年 以上	1 (2.8)
不 明	6 (16.7)
合 計	36 (100.0)

(%)

d. ベッドをやめた時期

今 の 家 に 入 居 す る ま え	12 (33.3)
今 の 家 に 入 居 の 際	5 (13.9)
今 の 家 に 入 居 し て か ら	11 (30.6)
不 明	8 (22.2)
合 計	36 (100.0)

(%)

4-3 潜在するベッド化要求

ー意識上つよいベッド志向ー

公団住宅ではベッド率が一割、マンションでは高く
て3割である。残りがふとん寝ということになるが、そ
の中にベッド主寝室への要求がかなり潜在していることが
注目される(図17)。ベッド化率が一割に満たぬ公
団であるが、その残りの4割近くがベッド化を希望
している。すでに3割のベッド化率を示しているマンシ
ョンでさえも、また残りの4割がベッド化を希望してい
る。相方ともに、かなりのベッド化要求が潜在し、事情
さえゆるせば、今後まだベッド化は進められるであろう。
そして、ベッド化が実現されていない理由として、部屋
の狭さ、住宅全体の狭さがあがり、狭さがベッド化要求を
阻んでいることが、ここでも指摘される。

現状の傾向と同様、若い夫婦にベッド要求が多く、子
供が成長期にある中年期の夫婦では少ない。後者の家族

e. ベッドをやめた理由

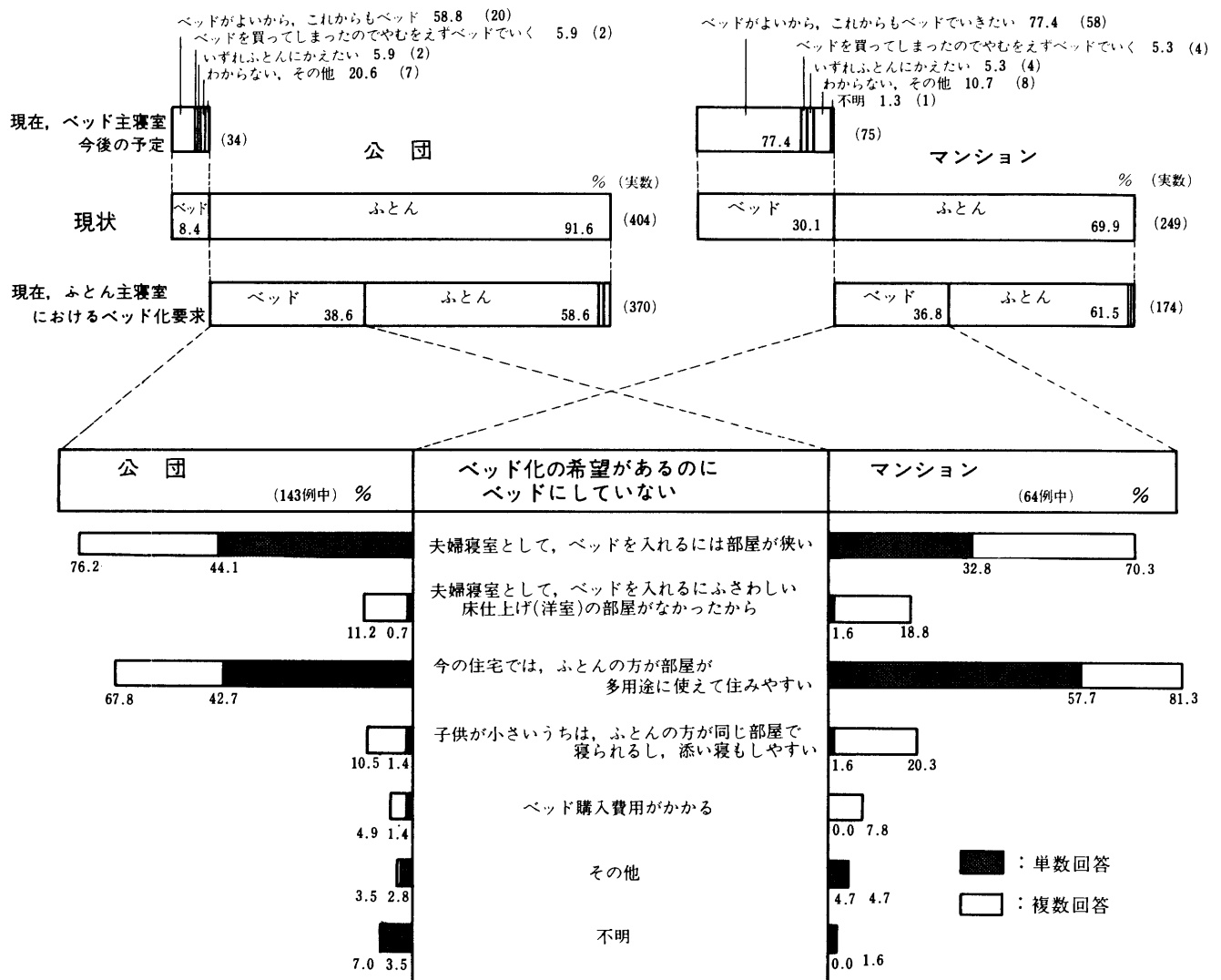
	複数回答	最大の理由
と に か く 狭 い か ら	17 (47.2)	13 (36.1)
子供がふえて狭くなったから	8 (22.2)	6 (16.7)
ふとんの方が部屋が多用途に 使え、住みやすい	14 (38.9)	3 (8.3)
ふとんの方が、子供の添い寝 がしやすい	0	0
ベッドの寝心地が悪かったから	4 (11.1)	1 (2.8)
そ の 他	0	0
不 明	12 (33.3)	13 (36.1)
合 計	36 (100.0)	36 (100.0)

(%)

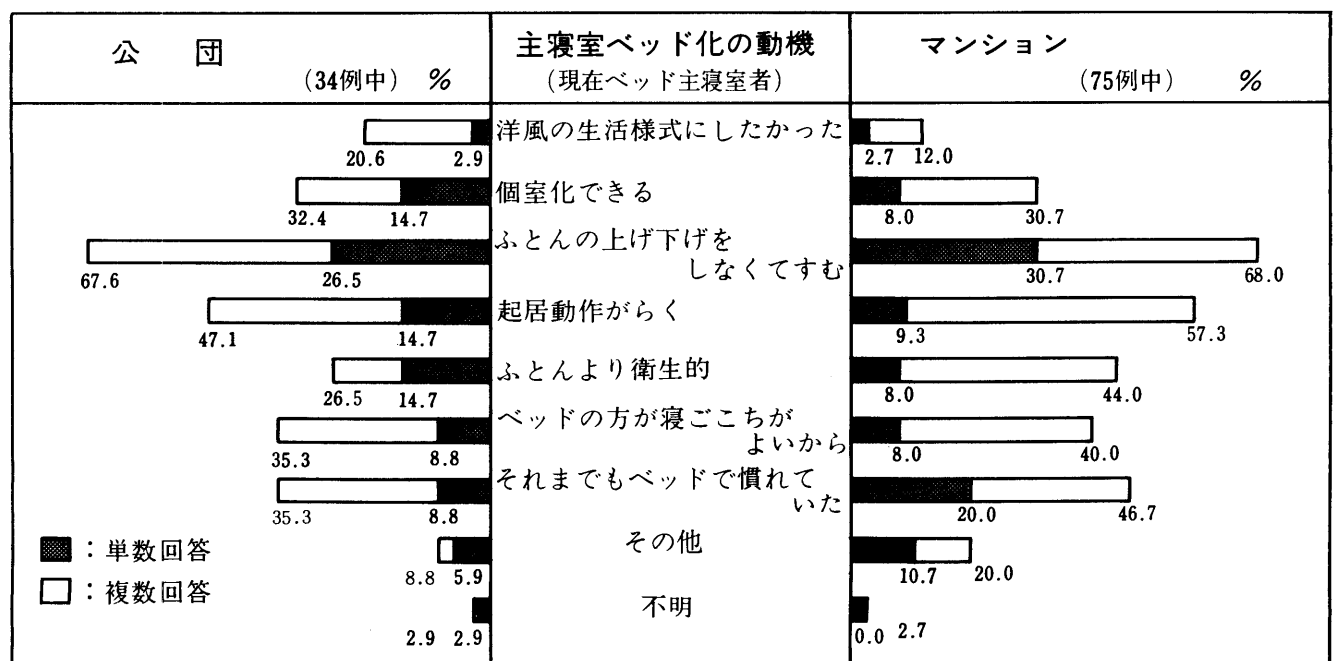
f. 今後の希望

ベ ッ ド に し た い 希 望 は あ る	13 (36.1)
ベ ッ ド に し た い が 無 理 か も し れ な い	5 (13.9)
ふ と ん の 方 が よ い の で ベ ッ ド に し た い と い わ な い	10 (27.8)
不 明	8 (22.2)
合 計	36 (100.0)

(%)



図一17 ベッドの定着と潜在するベッド化要求 〈公団・マンション〉



図一18 主寝室ベッド化の動機 —現在ベッド主寝室者—

周期段階では、ベッドにすると転用性がなくなることで狭さをより、反映してふとんの方がよいとするものが多いと考えられる。

以上のように、ベッド化の要求が強く、その要求を狭さが大きく阻んでいることは予想以上のことであった。

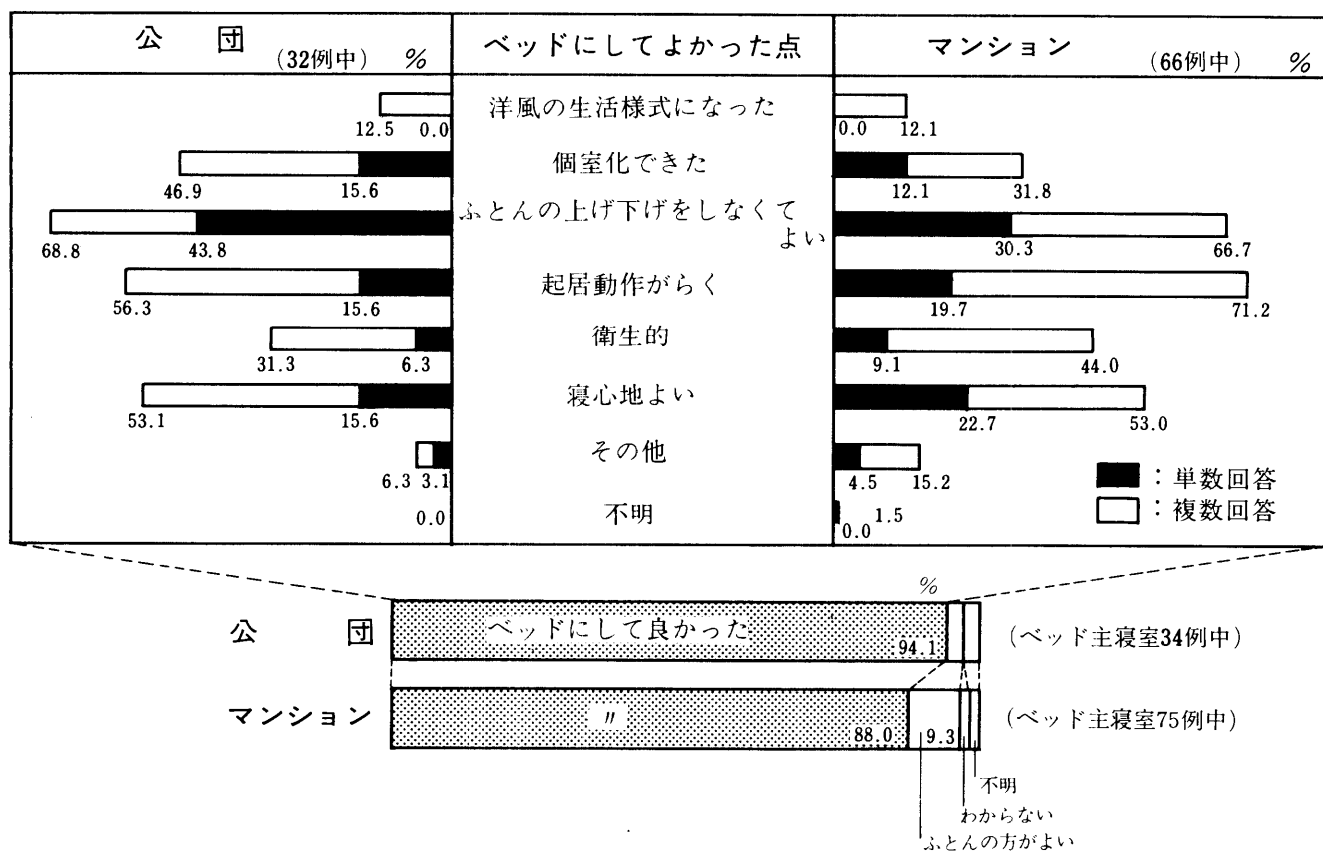
4-4 定着するベッド

(1) 強いベッドの定着性

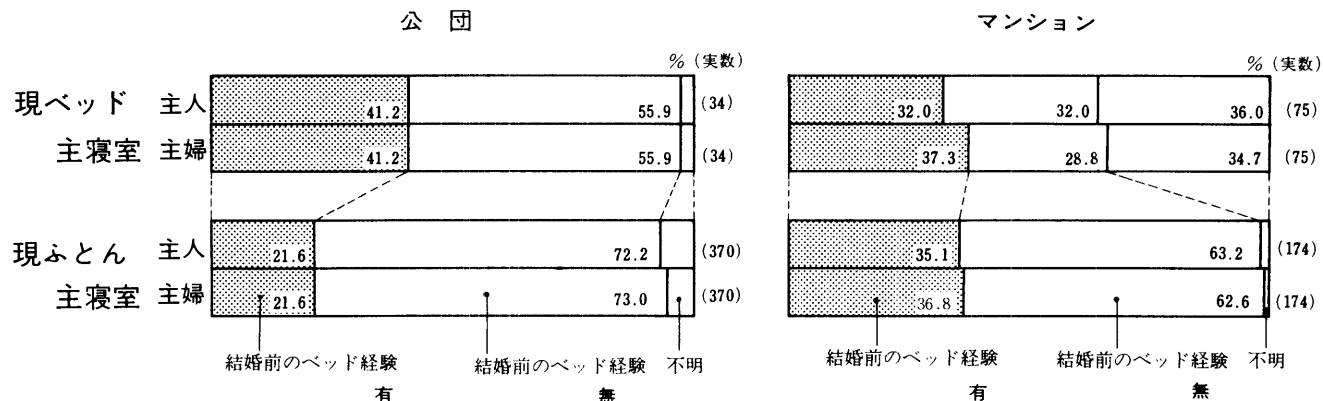
後述のように種々の理由（図18）に基づいてベッド化しているわけであるが、ベッドにしているほとんどは、今後も積極的にベッドがよいからベッドでいきたいとしており（図19）、ベッドの定着性にはかなり強いものがある（図17）。

(2) ベッド育ちの増加と主寝室のベッド化

先の学生調査においてベッド使用経験のあるものほど、将来の主寝室はベッドにしたいという希望が多かった。このことを逆に裏づけるように、居住者調査において主寝室をベッドにしているものは、ふとん就寝者よりも、子供時代にベッドを使用していた者（ベッド育ち）が多い（図20）。ベッドにした動機の中の1つにベッドに慣れているといった理由があげられていることから察せられるように、ベッド育ちの人々はベッドに慣れベッドしか考えられぬということで、結婚しても主寝室にベッドをえらんでいるもの多くなってきているのである。一連の起居様式調査において子供の就寝のベッド化が進行していることを明らかにしてきたが（図21）、今後



図一19 主寝室ベッド化への評価とその理由 —ベッド主寝室者—



図一20 結婚前のベッド使用経験と、現主寝室の寝床様式との関係

ベッド育ちが増え、主寝室ベッド化により影響を与えるだろうことが示唆される。

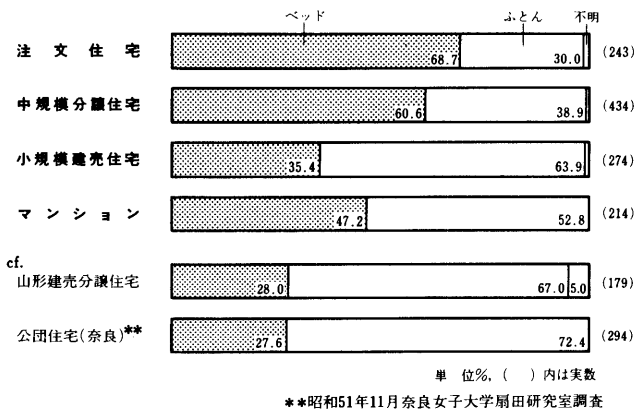


図-21 住宅階層別にみた子供の寝床様式のベッド化状況
一連の起居様式調査より

V 主寝室洋式化(ベッド化)への志向傾向と要因

5-1 ベッド志向の度合

ベッドの普及率の現状については4章でふれているが、マンションの場合、低いもので25%、高いものは64%であり、公団住宅の8.4%に比べて高い比率を示している。

そのような傾向をもつマンション居住階層のベッド志向は図17に示すように、全体的にみて半数52%である。

結婚適齢世代(学生)の70%台に比べると低いが、多少の年代的ずれと、生活・住居の現実的条件を加え考えると決して低い率とはいえない。

一方、公団住宅居住者層では、マンションに比べるとやや低い志向度(40%)である。しかし、ベッド普及率10%未満という現状に対応させて考えると、ベッド志向度が必ずしもマンションより低いとは断定できないだろう。それには後述するように居住面積のせましさ等の現実的条件が影響をおよぼしているものと考えられる。

5-2 現在の寝床様式別にみた志向

これを現にベッドを使用している者と、ふとんを使用しているものと別けて傾向をみると、図17のようになる。当然予期されることであるが、ベッド使用者の方が、ふとん使用者よりも、ベッド志向度が高くなる。

しかしマンション・公団の住宅階層を比較すると、マンションのベッド使用者では80%近い志向度に対して、公団層では60%とかなり下まわっている。これも後述のように理由のある差であろう。

ふとん使用者の場合は、両居住者層とも約40%で同

程度の志向度を示している。全体数の7~9割を占めるふとん使用者の中で、これだけの志向度があることは、かなり高いと考えてよいかもしれない。

5-3 年齢別にみた志向

上記のような事情を年齢別にみたものが図22である

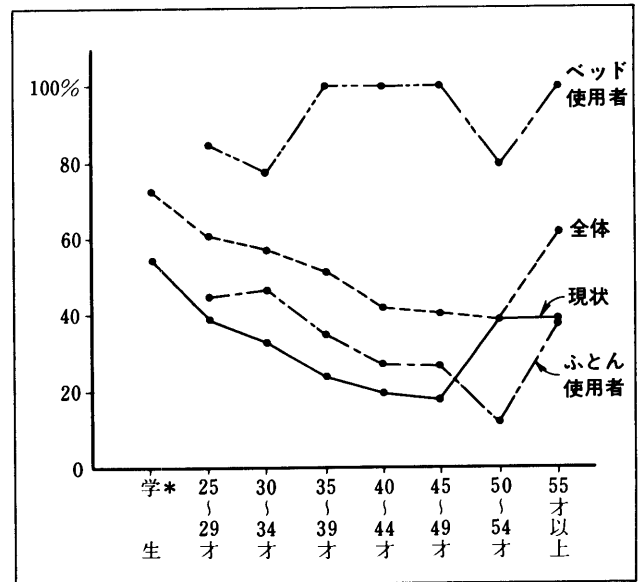


図-22 年齢別にみた今後の主寝室洋式化(ベッド化)要求

<マンション居住者>
*学生調査より

(ただしマンションの場合のみ)。これによると、学生をふくめ全体の傾向としては、年齢の若いほどベッド志向度が高く、年齢が高くなるにしたがってカーブが低下していくことが見とられる。しかし高年齢層になると再びカーブが上昇している点は注目される。老人にとって適度の高さの寝床が起居動作にかえって楽であるという事例をきくが、あるいはそのようなことを反映しているのかもしれない。

また、ふとん・ベッドの使用者別にみた場合、ふとん使用者では上記と同じ傾向を示しているが、ベッド使用者では年齢に比例する関連性はあまり感じられない。つまり現に使用している人は、年齢に関係なく高い支持率を示しているということである。たゞ30代以下の層が相対的にやや低い志向性を示していることについては、この年代層が、子供の誕生・成長の問題を抱えて、ベッドによる部屋の転用性の喪失を、一層深刻に感じる故かもしれない。

5-4 ベッド志向の度合と使用体験との関係

これまでにベッドを使ったことが「ある」か「ない」か、またどれほど長く使ったかは、ベッドの志向度にかかなり影響するであろう。図23は、体験の有無と志向度合との関係をみたものである。

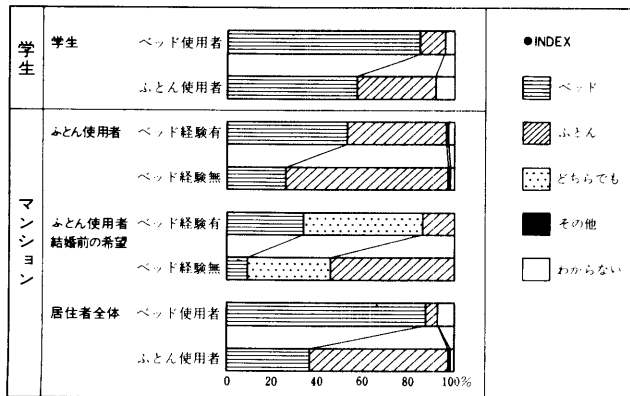


図-23 ベッド志向の度合と使用体験との関係

学生、マンション居住者中のふとん使用者、同居住者全体にわけて見ると、いずれの場合も過去にベッド使用の体験があるものほど、より多くベッドへの志向を表している。

また、同じふとん使用者の場合でも、結婚前と現在とを見比べると、結婚後の方が志向度が高く、つまりそれだけ志向の発展があったと考えられる。

図 23 の居住者全体の中のベッド使用者の場合、今後の志向度もきわめて高いが、その理由は表 5 のように「ベッドがよいから」(87.9%)という積極的な肯定を表している。現在の体験がさらに今後の意識を強めているものと考えることができる。

表-5 ベッド使用者の今後の志向度

	公 団	マンション
ベッドが良いからこれからもベッドでいく	20 (83.3)	58 (87.9)
ベッドを買ってしまったのでやむをえずベッドでいく	2 (8.3)	4 (6.1)
そ の 他	1 (4.2)	3 (4.5)
不 明	1 (4.2)	1 (1.5)
計	24 (100.0)	66 (100.0)

(%)

公団住宅居住者の場合にも、結婚前のベッド使用体験の有無を、現在ベッド使用、ふとん使用の両者にわけて比較してみると図 20.左のようになり、現在ベッドの使用者に、結婚前の使用体験者が倍近く多いことがわかる。

以上のことから使用体験がその後のベッド志向に大きく影響することが明白に考えられる。

5-6 ベッド志向の要因

ベッドにしたい理由を、予想されるいくつかの項目について問うたものが図 24.a である。これによると、マンション、公団居住者ともに圧倒的に「ふとんの上げ下ろしをしなくてすむ」であり、この点は結

婚適齢世代(大学生)の場合にも同様であった。ついで「起居動作がらく」、「寝心地がよい」、「個室化できる」などが、顕著な量で示されている。

しかしこれらは居住者の種々な条件により、かなり特色のある傾向を示している。

たとえば、高年令層では「ふとんの上げ下ろし」「起居動作がらく」などは、ひじょうに切実な理由として高く評価されている(図 25)。また「寝心地がよい」は、想像的にしかいえないふとん使用者より、実際のベッド使用者群に明瞭に大きくあらわれる。「個室化できる」については、よりせまい居住条件にある公団居住者層に多いということは、現実の制約に対する住要求の反映とみてよいだろう。

ふとん使用者の中には、ベッドを使いたいと思いつながら現実にはふとんで寝ている例がかなりある(図 17)。そうさせている理由を探てみると(図 24・b)、マンション居住者の場合、(図 17)のように、部屋の転用可能性をいうものが最も多い。ついで部屋のせまさを訴えるものが多い。前者も部分的には「せまさ」に通ずる理由ともいえる。あるいは主寝室としての夫婦寝室の独立性への要求が、欧米ほどに、はっきりしていない慣習のせいもありうるだろう。

結婚前にベッドを希望しながら、実現できなかった理由にも、夫婦の好みのちがい(12.5%)も多少あるが、住宅がせまかった(73.2%)ことが圧倒的である(図 15)。

同じことを公団居住者でチェックしてみると、住宅がせまかった(95.7%)という理由が、マンションに比べて一層明白にでている。

単に希望だけではなく、結婚前に夫婦それぞれがベッド就寝をしていながら、結婚入居後ベッドをやめた36世帯についても、「せまさ」の問題が提示されている。

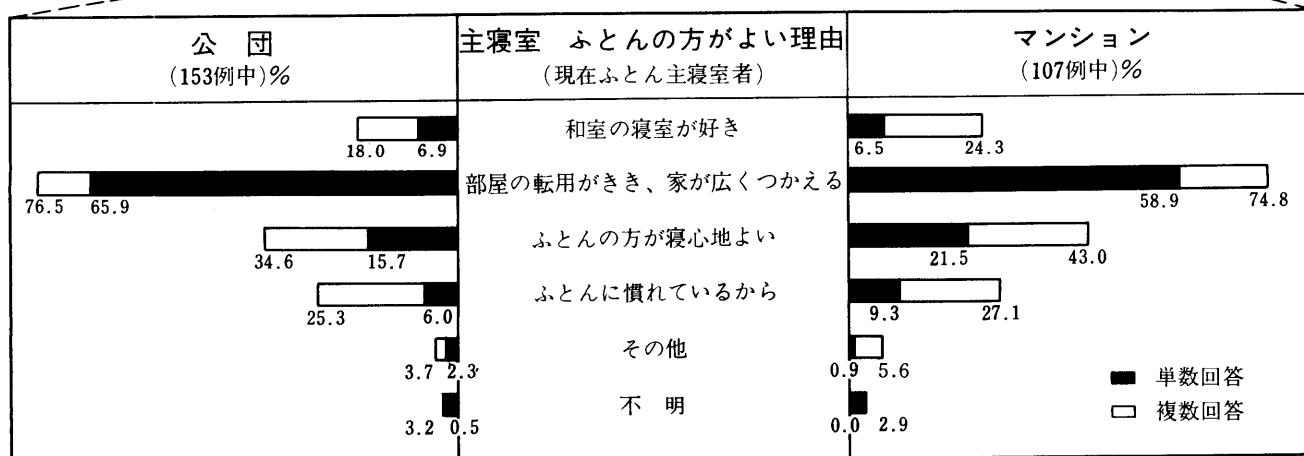
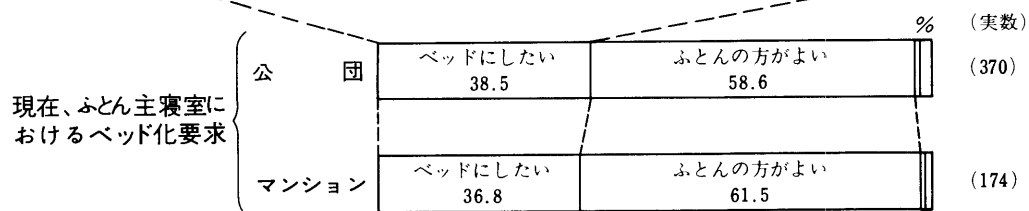
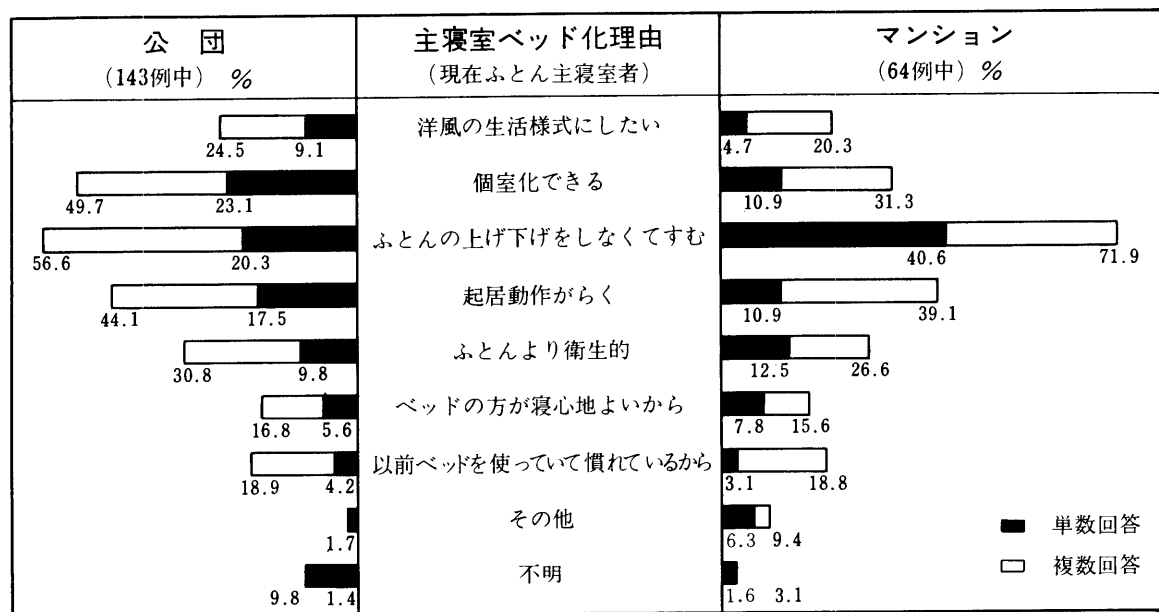
以上のような事例から考えると、提供される住宅の室数・居住面積の条件が、ベッド化の傾向を制約する最大の理由であり、その条件が緩和されれば、現在よりさらにベッド志向が大きくなる可能性が予測される。

VII 主寝室の洋式化に伴う問題点

一まとめにかえて一

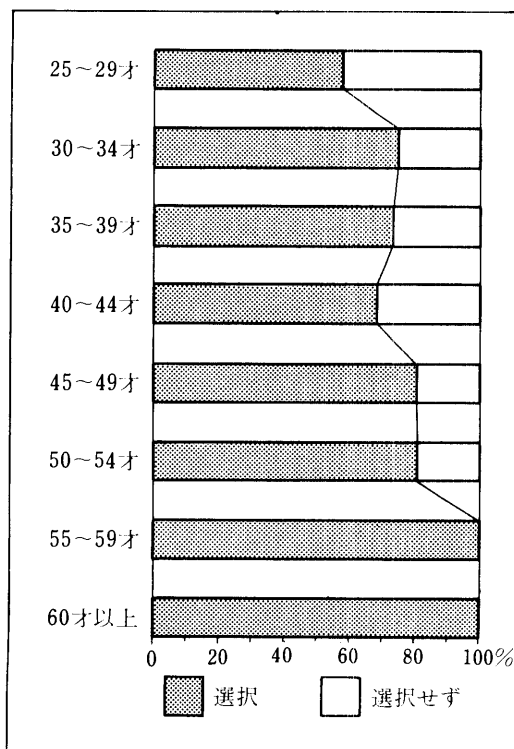
主寝室のベッド化要求が強いことを明らかにしてきたが、本研究のもう1つの大きな目的は、主寝室がベッド化されていく場合の問題点を明らかにし、今後の主寝室計画のあり方ひいては住宅計画のあり方を考えようということである。ここでは、それらの問題点についてそれぞれ想定している見解を概説し、本論の結語にかえたい。また、それについてはいずれ本報告書において詳述したい。

a. 主寝室ベッド化理由 —現在、ふとん主寝室者—



b. ふとんの方がよい理由 —現在、ふとん主寝室者—

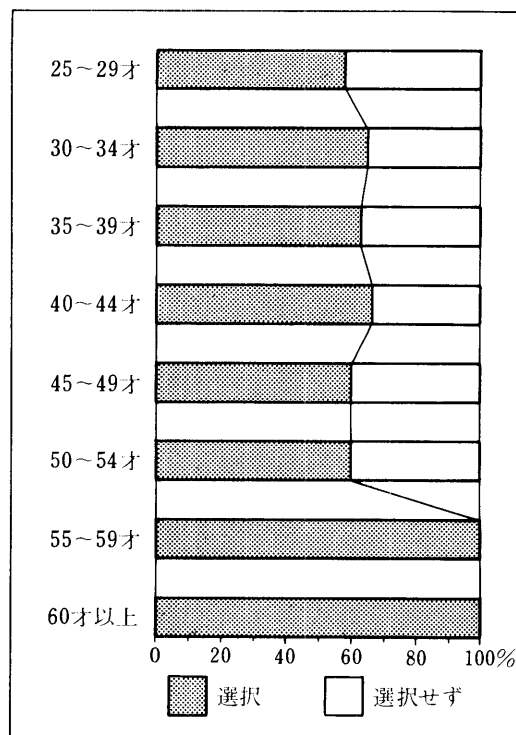
図-24 主寝室ベッド化理由, 及びふとんの方がよい理由
—現在、ふとん主寝室者—



a. 起居動作面の評価と年齢

＜起居動作がらく＞

(ベッドにして良かった理由)



b. ふとんの上げ下げと年齢

＜ふとんの上げ下げをしなくてすむ＞

(ベッドにして良かった理由)

図-25 年齢別にみた理由〈マンション〉

—起居動作面・ふとんの上げ下げ—

6-1 ベッド使用状況とその問題点

(1) ベッドの使い心地への高い満足度

ベッド自体の使い心地については、不満は極少であり、高い満足度が示されている。このことは、ベッドの定着性の強さの1つの理由としてとらえることができる。しかし、ベッド使用上、若干の問題点が指摘されるので、以下に述べる。

(2) ベッド寝具の和洋折衷的使用

学生調査では和式のふとんをベッドにのせて使用する「和式タイプ」が65～70%を占めている。居住者調査では、ベッドパッドにシーツをかけ、和式の掛けふとん・ベッド用掛けふとん（一部メーカーによって製品化されているベッド用掛けふとん）をかけて寝る「中間タイプ」が半数をこえているが、まだ「和式タイプ」も結構多い。そして、ホテルにみられるようないわゆる洋式のベッドメーカーによる「洋式タイプ」はほとんどされていないといっている。

(3) ベッド寝室における室温・寝具の採暖の増加

ふとん主寝室に比べて、ベッド寝室では暖房や寝具の採暖をするもののがかなり多いのが特徴的である。日本においてこれまで習慣にしてこなかった室温をそのまま就寝する事例が、一割以上存在し、寝具が和式から洋式

に近づくほど採暖する者が増加している。

寝具の3つの使用方式については、日本の居住条件の現実とからみあわせて考えると、それぞれ得失がある。たとえば「和式タイプ」では寝床面が高くなるだけで、ベッドの特質が活かされないとか、「中間タイプ」も含めて、夜具の滑り落ち、重さ等の問題が残るであろう。一方完全な「洋式タイプ」にした場合、寝床気温が保証されるだけの寝室気温を確保しうるかどうかという、とくに冬季の居住水準の問題等が論議される。いずれにせよどのような形でこの寝床形式を定着させ発展させるべきかが問題である。

6-2 ベッド主寝室の面積的問題

(1) 狭いところにダブルベッド入れてベッド化を

公団住宅、マンションともに、ベッド寝室は、部屋の狭さを反映して、ダブル形式（ダブルベッド1台、時にはセミダブル1台で）が多く、特に公団住宅ではそのほとんどがそうである。希望としてはツイン形式を望むものが多く、狭いところをダブルでもよいからなんとかベッド化したいという気持ちが見いだせる。

(2) 主寝室全体に対する高い不満

—広さに不満が集中—

主寝室全体に対する満足度は、ふとん・ベッド双方と

ともに低い、よりベッドの方に満足度が低い。その理由として、広さへの不満が集中している。

主寝室の広さの現状は、公団では広くても6畳(8.5~10.6㎡)までであり、マンションでも9.0~11.0㎡(6畳程度)が多い。前述のようにダブル形式が多いのは当然である。ベッドの他の家具類のスペースを考慮すると、6畳程度でツイン形式をとるのは無理である。希望として8畳、さらに10畳が要求されている。

6-3 ベッド寝室における収納のあり方

一目立つ押入れの転用及び改造例一

ベッド寝室における「従来押入れ型」収納形式への不満が多く、押入れの用途転用及び改造(押入れのワードローブ的使用)が目立っている。

畳に布団の従来からの和式寝室では、収納形式として押入が対応していたが、ベッド寝室になると、布団収納のための押入とは異なる収納形式が求められる。

6-4 その他一室機能・平面計画上の問題等

以上の各節に述べた事柄を総括する問題として、「洋式化」による寝室機能固定化が他の住機能におよぼす影響一ひいては住宅平面計画のあり方などが浮びあがってくる。

たとえば、ベッド化は主寝室の確保を促進する役割を果たすであろうが、一方では従来、寝室の転用で処理されてきた家事、接客等の空間の処理問題、また寝室と浴室あるいは家事と浴室などの新たな関連の可能性等が問題になってくる。これらについては既存調査の中で検討の用意があるが、ここでは一応問題を指摘するにとどめておく。